

第86回 原口一博の 世界の中の佐賀

佐賀出身の衆議院議員・原口一博が、日本の中心、そして世界から見た佐賀の姿を語る。

「パラオ共和国と平和の祈り」

皆さん、ペリリユー島という島をご存知でしょうか？日本の真南にあるパラオ共和国の島です。まっすぐ線を引くとちょうど日本の明石あたりが真北になります。人口2万人のパラオ共和国は、美しく豊かな海に囲まれた数々の島からなる国で観光を主な収入源としています。第一次世界大戦の後に日本の統治下に置かれた国です。国旗を見てもおわかりのとおりとても日本とつながりの深い国です。

国連総会をはじめ国際社会において一番とっていいほど日本の立場を支持していただく国の一つです。沖ノ鳥島などを岩礁だという海外の国に対しても決然として日本の領土であり島だと主張していただいています。沖縄諸島か

ら南に延びる海洋の大陸棚でもつながっており、距離は離れているもの、お隣の国と違っていい戦略的にも地政学的にもとても重要な国です。

ペリリユー島は第二次世界大戦の中でも最も過酷で悲惨な戦いが繰り広げられた島です。米軍による艦砲射撃、絨毯爆撃は凄まじく3日で終わらせると目論んだ米軍でしたが、島の洞窟などに隠れて日本軍は75日間も戦い続けました。米軍にも多数の死傷者が出ましたが1万1000人いた日本軍は、ほとんどが亡くなり生き残った人は、ジャングルに隠れて終戦後も戦いを続けていた人も含めて56人だったといわれています。

私は、この5月にパラオ共

和国を訪れて慰霊を行いました。赤道直下の強い日差し。昼は40度を越えるような地域。圧倒的な物量の差を前に兵站を絶たれてどう戦ったのだろうかと想像を絶する状況に言葉が失いました。車で15分も行くと島の反対側に出ました。こんな狭い島に日本兵だけで1万1千人もどうしていられたのだろうか？食糧も欠乏していたのではないかと思います。

50m下までも、もつと先までも澄んだ海は、とても美しく様々な色にその姿を変えます。地上の楽園とも言えるような地域です。70年前の悲惨な戦いの跡がそのまま残されています。このような美しい島で悲惨な戦いを強いられなければならなかったのか。戦争の恐ろしさ、罪深さ、人を人でなくしてしまう狂気の凄まじさにただただ手を合わせるのがやっとでした。

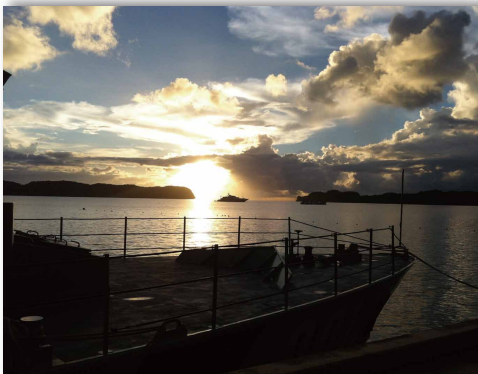
日本が作った学校の痕、そして日本名の人たち。70年前の紛れもなく日本そのものが南国の草の生い茂る中で残されていたのでした。3000人弱のペリリユー島の人たちが放置された軍用機や戦車を動かすことさえかないません。

日本人とわかるととても親しげに話しかけてくださいます。「日本は、学校を作った病院も作りました。私たちも同様に学ぶことができました。そして戦闘となると私たちペリリユーの民がまきこまれないようにと島から疎開させてくれました。」

戦争を二度と起してはならないという誓いの言葉とともに教育に力を入れた日本への感謝を述べられました。ご遺骨を収拾して帰国いただく事業も続けられています。佐賀のみやき町にお住まいの塩川さんをリーダーとするNPO

の方々功績も大きなものがあります。

パラオでお父様が日本学校の教員をしていたという方と話をする機会もいただきました。学制の創設に佐賀の多くの偉人たちが関わりました。教育の恩恵は、日本からはるか離れた地域の人たちの希望でもありました。人間の尊厳と命、歴史や文化、言語までも奪い耐え難い苦痛を与えた帝国主義・植民地支配。二つの世界大戦、地域紛争の続いた20世紀は、大量破壊兵器と大量殺戮の世紀でもありました。その中においても人間らしさを求めて教育を普及していく試みがなされていたことも平和の誓いとともに語り継ぎたいと思います。



PROFILE

昭和34年・佐賀市生まれ。佐賀西高校、東京大学卒。昭和58年、松下政経塾に入塾、昭和62年には佐賀県議会議員に無所属で立候補、27歳で初当選を果たす。平成8年、佐賀県第1区より新進党公認で出馬し衆議院初当選。現在6期目。衆議院議員としてこれまで、予算委員会理事、財務金融委員会筆頭理事、衆議院総務委員長などを歴任。平成21年には総務大臣、内閣府特命担当大臣（地域主権推進担当）を務めた。現在、総務委員会筆頭理事。